日中文化交流史 ⑨

鈴木 靖

「工匠精神」～中国の人びとを驚かせた日本の工芸技術

中国の人びとの対日イメージの一つに、「工匠精神」があります。日本には精緻で遊び心ある匠の心があるというのです。では、このイメージはどのように作られたのでしょうか。

唐の蘇鶚の『杜陽雑編』に、こんな話があります。

穆宗の時代（820～24年）、倭国の人・韓志和は、からくり細工を得意とし、木で鳥を作って飛ばしたり、猫を作って鼠を捕らえさせたりしていた。その噂は皇帝の耳にも入り、韓志和は皇帝のためにからくり寝台を作ることになった。踏み台を踏むと竜が飛び出す仕組みである。ところが、あまりの迫力に皇帝は仰天。韓志和は罪を償おうと、小箱から数百のからくり蜘蛛を取り出し、音楽に合わせて踊らせたり、蝿を捕らえさせたりした。皇帝は喜び、褒美に銀の碗などを与えた。韓志和は宮門を出ると、それを人びとに分け与え、姿を消してしまった。

賀陽王（菊池武保『容斎』編画『前賢故実』巻之四より）

韓志和は、名前は中国風ですが、「倭国の人」と明記されています。

一方、日本の『今昔物語集』にも、こんな話があります。

昔、高陽親王という、からくり細工の得意な皇子がいた。ある年、親王が建てた京極寺の水田が旱魃で干上がってしまった。親王は子どもの姿をした人形を作り、田に立てた。人形の持つ器に水を入れると、人形の顔に水がかかる仕組みだった。

都中の人が集まり、水を入れて興じた。田に水が溜まると、人形を仕舞い、田が涸れると、また人形を立てた。こうして寺の田は旱魃の間も干上がることはなかった。

高陽親王（賀陽王とも）とは、桓武天皇の皇子で、794年の生まれ、871年没。韓志和とほぼ同時代の人です。律令の施行細則を記した『延喜式』によれば、遣唐使には、工芸技術を学ぶ技術研修生も含まれていたといいますから、日本の遊び心ある技も語り伝えていたことでしょう。あるいは韓志和も技術研修生の1人だったのかも知れません。

宋代になると、日本からは刀や扇、螺鈿、蒔絵などの工芸品が輸出されるようになります。宋の江少虞の『事実類苑』には、扇絵の描かれた「日本扇」が都の市で、非常な高値で売られていたことが記されています。

「工匠精神」という日本のイメージは、こうして作られていったのです。

（法政大学 国際文化学部教授）